２０２４年０４月１８日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２４頁

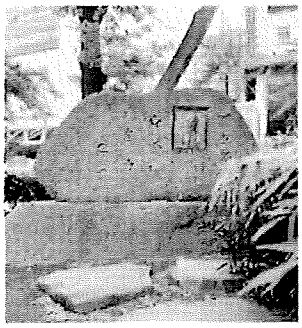
独歩作品 強く意識

文人の武蔵野

大岡昇平 ②

大岡昇平（1909～88年）にとっての渋谷は、「武蔵野の面影を残した古き良き渋谷」であり、同級生たちとの想い出が刻まれた場所でした。

大岡が生まれる10年ほど前、国木田独歩は、まだ村だった渋谷で着想を得て「武蔵野」（1898年）を発表しました。続いて1901年、与謝野寛は「紫」を、晶子は「みだれ髪」を発表し、渋谷で結婚生活を開始します。ふたりはともに渋谷を「武蔵野」と呼んで夫婦となり、生涯にわたって歌人として「武蔵野」の歌を詠みました。文学史において、大岡が武蔵野の面影を残す「渋谷」を介して独歩や与謝野夫妻の系譜を継いでいることが確認できると思います。



「山林に自由存す」の碑（三鷹駅北口で）

実際、戦後になり大岡が「武蔵野夫人」（1950年）を書いたとき、独歩の「武蔵野」が強く意識されていたようです。埴谷雄高との対談「二つの同時代史」での証言によると、当初考えられていた題は「武蔵野」だったようです。ところが独歩の「武蔵野」があるからダメだと編集者に変えられて、「武蔵野夫人」になったそうです。

大岡は、「山林に自由存すなんていうけれども、ナラやクヌギ林の山林というのは村の入会でタキギを取るために植えたからあるんで、自然に生えるものじゃない。そこへ入り込んだ文士が、山林に自由存すなんてほざいているのは滑稽だ、とやっつけてやるつもりだったんだよ。そうしたら、なに、やっぱり独歩のほうが強いんだ」とオチをつけて語っています。

外から「入り込んだ文士」が、地元の植生のことも知らずに武蔵野の人工林を「自然」だと勘違いして書いたのが独歩の「武蔵野」である、としたとしてもあながち間違いではありませんし、案外本気で「やっつけてやるつもり」があったのではないでしょうか。

ただし、「山林に自由存すなんてほざいているのは滑稽だ」のくだりには留保が必要です。武者小路実篤が筆で認めた碑が三鷹駅北口にあるように、「山林に自由存す」だけが人口に膾炙していますが、「山林に自由存す」は独歩の詩の題であり一部です。作中には「なつかしきわが故郷は何処ぞや 彼処にわれは山林の児なりき」というフレーズもあり、「山林」は「武蔵野」だけを指すわけではありません。独歩に即して実体的に考えるなら、生まれ育った銚子や山口の山林も考慮に入れなければなりません。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。